

虚空の玉座

道長(最近灯に目覚めた)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ウイニングポストやってたらオグリキャップの仔で大物が出たのでウマ娘に落とし込んでみた。備忘録的な何か。

架空馬多数。続きは未定。

ちなみにエアグルーヴの同期。対戦があつたウマ娘実装馬はブライアン、マヤノトツプガン、マーベラスサンデー、タイキシヤトル、そして黄金世代。

追記　なんか足んねえよな？　と思つていたらメジロドローベルを忘れてました。あとフクキタルも。そしてメジロブライトもモデリング出来てたんですねー。君ちよつとかき回しすぎじゃない？

目次

第三話	第二話	第一話
21	11	1

第一話

「ん？なにしとんやオグリ？」

放課後、小腹が空いたタマモクロスは「たまには買い食いもエエか」と、購買部に寄ると見慣れた後ろ姿を見つけたので声をかけた。

「ひやいつ?! えつ、あつ、こんにちは！」

「なに改まつとんねん。調子狂うわ」

らしくない反応といつもより高く聴こえる声に違和感を感じつつも、こういう日もあるかと軽く流して横に立つ。

ここでまたしてもタマモクロスに違和感。

「……オグリ、最近縮んだか？」

なんとなくオグリの顔が近い。

「へっ？ これでも1cmくらいは伸びてるんですけど……？」

「そっか。じゃあウチが伸びたんやな。ハッハッハ。つてなんでやねん」

毎朝計つても1ミリも変わつとらんわ、と自虐ネタを呟きつつオグリの顔を見る。

よう見るとコイツやっぱかわええなー、とか。腹さえ膨れてなきや深窓の令嬢や

な、とか。今日はなんか妙に品があるな、とか思っていた。

「あの。あまりそうまじまじと見られると、その……」

「ああ、すまんすまん。よう見るとやっぱ美人さんやな」と思ってたな」

「びつ、美人だなんてそんな……」

「まあ、見てくれはな。よだれ垂らして寝てたら訳ないけどな」

「よ、よだれ!?!」

慌てて口許を触るオグリ。今日のオグリはやたらと可愛らしく見える。

「冗談やて。そういや、こんだけかき回してなんやけど、自分なにやつとるん?」

「えーと、小腹が空いたのでちよつとはしたくないんですけど、買い食いとやらを試してみよ

うかと思ひまして」

「なんやそんなことかいな。気にせず端から端まで頼めばええやん」

はしたないとか乙女か。乙女やったな。いや怪物やったわ（日頃の食事を思い出しながら）。と流れる様に内心でセルフツツコミをいれていると、衝撃の言葉がオグリの口から紡がれる。

「どれも美味しそうですけどー個で十分ですよ」

その時タマモクロスに電流走る……!

「……すまん。聞こえなかったわ。もう一回言ってくれるか?」

「あつ、はい。どれも美味しそうですけどー個で十分ですよ」

「ハツハツハ。冗談キツイわー。さつきはからかつてすまんて。堪忍してーや。いつもみたく端から端までいってええんやで。なんなら往復でも」

「そんなに食べられませんかよ。そうです。折角ですから半分食べていただけませんか？
そうしたら私も2個頼めます」

「はんぶ……ッ!？」

すいませーん、地の文ですけど、まーだ（気付くのに）時間かかりそうですかねー？
ちようどその時スーパークリークが通りがかった。

「クリイイーク！ちよ、助けてくれー!」

「あらあら、どうしたんですかタマちゃん。オグリちゃんも」

「あつ、こんにちは」

「オグリがパンを半分しか食べえへんとか言つとるんや！保健室に連れてくから手伝つてえな!」

「ふふふつ、焦つちやいけませんよタマちゃん。オグリちゃんは朝もパンでしたから飽きちやっただけです。オグリちゃん、ちようどカレーが煮込んでありますから食べませんか？ お腹が空きすぎて縮んじやってますよー?」

お腹が減る⇨縮むの方程式を成立させてる時点でクリークも相当テンパっている。

そもそも何故カレーが煮込んであるのか。いや、常日頃のオグリを見れば納得ではあるのだが。

当人たちに自覚は、ない。

「えーと、嬉しいですけど、流石にこの時間にカレーを食べたら夕飯が食べれなくなってしまうので、ごめんなさい。そうです！ これで3つ頼めます」

「タマちゃんどうしましょう！」

「だから言うたやろ！ 119やイチイチキュー！ 救急車や！ 救急車！」

「おーい、どうしたー？」

「ここでもイナリワンが登場。

あーもうメチャクチャだよ（諦観）。

「イナリイツ！」

「イナリちゃん！」

「こ、こんにちはー？」

「なにやってんだよ3人とも。もしかしてオグリが飯食わないとか言ったのか？」

「そのとおり（や）なんです！」

「てやんで救急車なんて待つてられるか！ さっさと病院に連れてくぞ！ アタシとタマが運ぶからクリークは電話してくれ！」

「えっえっえっ!!」と抵抗する間もなくタマモクロスとイナリワンの2人の脇に抱えられるオグリキャップ(?)。

クリークがスマホで今まさに119にかけようとした次の瞬間。

「むっ? 今日のみんなで集まる予定でもあったか?」

葦毛の髪に涼やかな目許。いかにもクールでちよつと近づきにくい美人と言った見た目を、手に抱えた山盛りの菓子パンと膨らんだお腹がこう……、うまい具合に中和しているウマ娘、オグリキャップがそこに居た。

「「……えっ?」」

思わず3人が抱えられているオグリキャップ(?)と、お腹が膨らんだオグリキャップを交互に見る。

「「オグリ(ちゃん)が2人ー!」」

とある週刊誌のインタビュー記事

「まずはラクローヌとの出会いから話しましょうか。初めて会ったのは2歳の新馬追切の依頼でした。見事にオグリそっくりの芦毛でね。びっくりしましたよ。親子とは言えここまで似るものかと」

既に大器の片鱗は見えていたと？

「いや。流石に見るだけでそこまでは分かりませんよ。ただもの凄く好奇心旺盛でしたね。オーナー、牧場長と話す自分をじっと見つめてきました。初対面の人間を見たら暴れてもおかしくないんですが、彼はそんな素振りを一切見せませんでした」

後々話題になる「ラクローヌは人の言葉を理解していた」の噂の原点ですね。

「噂もなにも、人語の理解はともかく、ラクローヌは人間が何を言ってるかは分かっていますよ。そうじゃなきゃ説明がつかないことが多すぎる」

噂の真偽を確かめるのも記者の仕事ですので。不躰な質問をしてしまい申し訳ありません。

そのあと初騎乗したわけですよね？

「ええ。乗つてもつと驚きました。軽く追うとすぐに反応してね。途端に重心が低くなつても凄い加速をしました。その時「ああ。オグリキャップだな」って。まあ、オグリキャップはそこから更にもう一伸びするんですが。でも2歳でそれです。しかも馬体の完成はまだまだ先と見た。もう舞い上がっちゃって」

ルドルフの主戦を務めた歴戦のジョッキーでも、ですか。

「いつもなら乗り味がどうか、新馬戦についてその場で軽く意見交換をするんですが、あの時だけはそうはいかなかった。牧場長の「いいでしょ？」って言葉に「いいですね」って応えるのが精一杯でした」

新馬戦は12月の第1週、かなり遅いデビューだったか？

「健康面の不安もそうでしたが、何よりノーザンテーストの最高傑作『ソール』の初仔でしたから。母親の時の苦い経験もあって、オーナーも牧場も慎重だったと聞いています。本来ならソールの主戦を務めた久保村騎手に夢の続きをと思ったそうですが、先約があったので、ちよūdō予定が合った自分に依頼がきたんです。オグリキャップの仔は中々大物が出なかつたので軽い気持ちで受けたのですが、結果は皆さんがご存知の通りです（笑）」

実を言うとあの新馬戦は私も見ていたんです。スタートからバーツと、すごい勢いで駆け出してあつという間にハナに立ってしまつて。

1000mと勘違いしてるのかと思いましたが。スタンドも驚きと落胆で、怒号と失笑じみた笑い声が上がつたくらいですし。

血統に加えてオグリキャップそっくりな見た目と堂々としたパドックの様子を見てか、一番人氣の単勝1・6倍。

自分もそれに乗った口で、思わず手元の馬券を投げてしまいました。

「乗っていた自分もちよつと焦りましたね。ゲートでもパドックでも落ち着いていたので「ここでやるのか」って。ただオーナーには「いま勝たなくていい。将来を見据えた競馬をして欲しい」と言われていたので、能力を図るためにも「行けるところまで行ってみよう」と切り替えました。鞭をいれるのはもちろん、変に押さえつけてレースに忌避感を持たれることの方が致命傷ですからね」

最終コーナーに入って10馬身以上差をつけた辺りからスタンドからどよめきの声
が聞こえてきました。

差が縮まるどころか拡がってるんですから。

「手綱を握っていて「あれ？あれ？」と。そのままゴールまで駆け抜けるとは思って
もいませんでした。後ろを振り返ったら後続がやつと最終直線で競ってるくらいで」

私も慌てて投げ捨てた馬券を拾いました。

ゴール時のあの沈黙と歓声は今でも忘れられません。

「何せ誰もが望んでいて半ば諦めていたオグリキャップ産の大作ですから。オーナーの
意向なんてすっかり頭から抜け落ちて「ホープフルSいきますよ！」なんて。無意識に
口走ってました。新馬戦の内容と疲労具合から、「月末ならなんとか」ということで、調
教師の先生からOKが出たので助かりました（笑）」

すでに朝日杯フューチュリティステークスを制すバブルガムフェローに騎乗していた訳ですが。

「バブルガムフェローには悪いですがモノが全く違いました。ただ比較的丈夫そうだったので、うまく噛み合えば大きいところを取れそうとも思っていましたね。現実には調教中に脚を骨折してしまって、皐月賞も日本ダービーも不出走でしたが。虚弱体質だったラクローヌが、結局クラシックを走り切ってしまうんですから分からないものですね」

後ろはまだ来ない！ 最終直線に入って、先頭はオグリラクローヌ。差が拡がる拡がる！ 後ろは完全に千切れた！

圧勝です！ 快勝です！ 大楽勝です！ これはモノが違う！ 2着は微妙です。勝ったのはオグリラクローヌ！ 皐月賞と同じコースで圧倒的なレースを披露しました！ クラシックに向けて夢が広がります！

これは王冠を頂いて産まれたと言われる一人のウマ娘。

玉座に座らざるをえなかつた、ただの小娘の物語。

第二話

サブトレーナー上がりの方が彼女の担当になれたのは割りと作爲的なものがあったりする。完全に断定出来ないのは状況証拠しかないのと、それでも選んだのは彼女だからだ。

最初に見たのは学園の野良レースもどき。

秋口、ある意味T大に入るより難しいと言われるトレセン学園に、わざわざ編入してきたというウマ娘が、ちよつと人数の多い並走を行うという噂を聞いて野次ウマ根性がムクムクと起き上がった。それだけのこと。

来てみればそれなりの観客がいる。大抵の有望株は夏までの選抜レースでトレーナーが付いているし、そうじゃなくてもほとんどが内定をもらっているこの時期、未知の新人というだけでそれなりの需要はある。実績のない新人トレーナーから、既にチームを持っているベテランまで幅広い層が集まっている。

それにしても無名の新人に対して、この人数は多い。理由はひとえに
(似ている)

あのオグリキャップに似ているという見た目だろう。

オペラグラス越しに覗くと、同じ芦毛ということを示し引いてもそっくりだ。名前もオグリラクローヌときた。

姉妹かもしくは親戚か。そう勘ぐる者もいたが、どうも血のつながりはないのと。

(しかしよく見れば結構違うな)

稀代のアイドルウマ娘でありながらイマイチ庶民的感觉が抜けきれないオグリキャップと違って、雰囲気や佇まいはどちらかと言えばメジロやサトノに近い。つまりある程度礼儀作法に通じる環境にあつたということだが、あまり深く考えると藪蛇になりそうだ。知らぬが仏という言葉もあるし。

それにもう準備が終わつたようだ。オグリラクローヌの背景がなんであろうと、結局はレースで勝てるかどうかである。

どんなものかと、サブトレーナーとは言え超一流に近いウマ娘を間近で見てきた自分は、軽い気持ちでレースを観戦していた。

そんな自分の気持ちを知つてか知らずか、レースも随分あつさりど決まつてしまつた。序盤に例の編入生がスリリとハナを取つてそのまま逃げきつてゴール。他の参加者も軽く追う素振りがあつたが選抜レース前、あるいはデビュー前ということもあつて実力が把握しづらい。周りもあまり本気を出せない状況だつたのだ。

それを踏まえてもスタートは見事だったし、1400mを逃げきる体力とスピードもあるということで何人かがスカウトしていたが

「た、大変申し訳ありませんが、そのようなお話は選抜レースの後でお願いします！ 皆さん今日は練習ありがとうございましたあ！」

言うか言わないかの内に逃げ出してしまった。デビューを考えればトレーナーが付くのは早いに越したことはない。話も聞かずに去ってしまうのはアスリートとしては疑問符がつく。

実際はその律儀な対応と、逃げ勝ちしたレースの後とは思えないスピードに、トレーナー達の評価は上がっていたが。カッとなりやすい気性難タイプよりかはやりやすいだろう。

まあ、どう転ぼうと自分には関係ないということまでトレーナー室に戻る道中。

「おや。奇遇だなサブトレーナーくん。失礼、今は正トレーナーだったな」

「……ルドルフ」

三日月を思わせる流星に、貫通ビームみたいな眼光。このトレセン学園の頂点に立つ皇帝陛下に出会ってしまった。他の生徒となんら変わらない学生服だというのに威厳がダダ漏れしている。

「君も編入生を見に来ていたのか。どうだい彼女は。君の眼鏡にかなうかな？」

「かなうもなにも高すぎて手が出せない。そのうえ下手に手を出したら壊れそうだ」
「ほう。『壊れそう』?」

「……これのことだ。色々と情報は掴んでいるのだろう。その上で自分に何を求めるのか。」

「さつさと要件を言え」

「何のことかな? 私はただ世間話が出来ただけさ」

「理由なく、人気のない場所で、偶然、私と世間話をするほどトレセン学園生徒会長はヒマか?」

「……私はそんなに信用がないかい?」

急にシヨンボリし始めた。だが騙されんぞ。

「信用はしている。多分地球上のウマ娘の中では一番。お前の動機は結局『ウマ娘のため』に帰結するからな。だからこの状況に作為しか感じないんだよ。もう少し率直に話せ。生徒会は縦割行政の予行演習か」

「君が勝手に勘繰っていることもあるんだがね。とにかくその『壊れそう』の意味を教えてください」

「どうやら逃す気はないようだ。……きつとこの場所で話すことにも意味があるのだろうか。」

「そのままだ。何であれだけの実力があって今頃ここにきた」

「おやおや、君ともあろうものがオグリキャップの例を忘れたかい？ 地方で急に頭角を表した可能性もあるだろう」

そのわざとらしい失望顔はやめる。本当にそれしか考えてなかったらトラウマ不可避だぞ。

「ありえん。オグリキャップの場合は家庭環境も絡んであんな形になったが、彼女を見るにそうじゃないだろう。メジロ家やサトノ家、あるいはシンボリ家クラスのウマ娘は、地方レベルのシゴキで急に伸びるほど生温い練習なんてしてこない。成長曲線はそれぞれだから完全否定は出来ないが、それを除くのなら能力的な部分以外の問題だ」

「なるほど。それなら健康面に不安があると君は見た訳だ」

「それだけならいいがな。それなりの家特有の事情だった場合、対応はもつと面倒だ」

フジ家の彼女のように。

メジロ家のおばあさまとの仲は良好だというのが、他がどう思うかは別問題、むしろあの方の器がデカすぎる。

娘の婿養子の不義の子、それもよりによって悲願の天皇賞を取られたという状況で、真つ先に祝辞を送ってきたのだから。「あなたは喜んでいいのです」の言葉に、涙を堪えられなかった彼女の姿を、私は鮮明に覚えている。

まあ婿養子がコッテリ搾られているというのは専らの噂だ。別に不義そのものが許されたわけではない。

親子3代制覇がかかっている孫娘にも、おばあさまが直々に言い聞かせているのとこのと。

「これだと思つた相手には、きつちり首輪をつけておけ」と。

「能力に目が眩んで余計なことをすれば、比喻でも何でもなく『壊れる』か『壊される』、最悪は『壊す』ことになる。そんなガラス細工みたいなウマ娘に現役を全うさせられるトレーナーが、今何人いる？ それこそお前の所か、私の師匠くらいだろうよ」

でも毎回うまくいくわけではない。そうなつた時に杖にも盾にもなれる人間はごく一部だ。そのごく一部の人間も、現在厄介ごとを引き受けられる状況ではない。前者は学園最強チームのトレーナーとして責任を果たす必要があり、後者は海外支部に出張中。

「自分なら、とは言わないんだな。君は」

「なあルドルフ。トレーナーの仕事とはなんだ。ウマ娘達を育てることか？ 大きなレースで勝たせることか？」

「君はそうはおもつてないわけだ」

「私は『納得できる終わり』を用意してやることだと思つている。『お前の選んだ道が間

違いだったんだ。だから自己責任な』。20も生きてない子供に全部押し付けるかね？

自分の意思で苦しい道を選んだ。それに対する報酬はあつていいと思うんだよ」

一勝も出来ずに、レースに出ることすら出来ずに、学園を去るウマ娘が毎年何人いることか。それでもいつか『この道を選んで良かった』と、思つて欲しい。

その為のトレーナーがいてもいいはずだ。

「要するに最後に落ちこぼれ達を拾い上げると。日本トレセン出身で初めて海外G1を獲得した『スズパレード』のサブトレーナーにしては、ずいぶんと庶民的な考えだ」

「いつもお優しい皇帝様にしては随分な言い方をするな。あれは師匠の功績だよ」

マスコミには自分のことは一切報道されてないし、現にトレセン学園内でそれを知つてるのは目の前の皇帝と当時のマイル王者、学園首脳陣に師匠と親しかつた一部のトレーナーだけ。

「大体、前も言ったが、その表現は正しくない。確かに『純』日本出身で初の海外G1を制覇したのはスズパレードだったが、日本トレセン出身なら先に欧州オークス三冠を成し遂げてるウマ娘が……おい待て。何故わざわざそれを言う」

嫌な予感が走つたのと、ルドルフがイタズラを成功させた子供のような笑顔になつたのは同時だった。

「さてさて、お優しいサブトレーナー様は編入生をどう思っているのかな？」

「いくら『皇帝』でもやっていい事と悪いことがあるぞ……!」

わざわざこんな伝え方をするのだ。恐らく彼女にすら他言無用のお触れが出ているはず。

「こんなことを私に話して何になる。何をさせるつもりだ」

「何を話したかな? 私は世間話をしたただけだよ」

見事ババを引かされた気分だった。

そして多分、近くにこの話を聞いているウマ娘がいるはず。

「それより感想を是非聞きたいんだ。この場でね」

「……選ぶの本人だ。実績も経験もないペーパーの新人の元に来る奇特な趣味は無いと思うね」

なんとか声を絞り出して、この場から逃げるのが精一杯だった。

トレーナー室の入り口を後ろ手で閉めて、1人になったことを確認して、やっと体から力が抜けた。

「あの『ソール』^{女帝}の娘とか、頼むから笑えないのは駄洒落だけにしてくれ……」

「また彼に嫌われてしまったな」

流石の彼も狼狽している様子だった。しかし少々イジリすぎたか。察しのいい相手にはついついやり過ぎてしまう。ブライアンにも釘を刺されたばかりだと言うのに。

「とまあ、こんな男だ。私が紹介出来るのはこの程度しかいないんだ。すまないな。ラクロー又くん」

「いえ、とんでもありません。ありがとうございます。ちょっと部屋で考えてみます」
口ではそう言っているが、顔を見るに決心は固まっているのだろう。

「ですが、なぜ私にここまで取り計らってくださったのですか？ 残念ながら私は勘当された身です。見返りなんてありません」

「君の母が誰であろうと同じことをしていたよ。理由は……彼と似たようなものだ」
でも彼をイジリ過ぎてしまうのは彼自身にも原因があると思うのだ。

「わざわざこの時期にトレセン学園に編入してきた君の覚悟と情熱に対する敬意さ。だが私はここまでだ。あとは彼の言うとおりで自分で選んで欲しい」

「……ありがとう、ごさいます。失礼します」

一応納得して帰っていった。なんとなく気怠そうな足取りで。

精神的なものもあるだろうが、1番の原因は健康面なのだろう。スプリンターでは無

いと言うのに1400mでそこまで消耗してしまうとなると、道は険しいと言わざるをえない。

それを承知で彼女はここに来た。

彼女が十分離れたのを目と耳で確認して、胸ポケットで通話状態にしてあったスマホを取り出す。

「彼は貴女のお眼鏡にかないますか。女帝閣下」

第三話

「もう一度確認するが本当に私で良いんだな？」

「はい。よろしくお願いします」

秋の選抜レースが終了後、案の定数多のトレーナーに囲まれたラクローヌをトレーナー室に何とか連れ込む事が出来た。かなり強引な手を使ったから後が怖いが。

「でも良かったんですか？ リギルの名前を引き合いに出すなんて」

「生憎私にあのトレーナーの群れをどうこうする力はないよ。ルドルフの言質も得てい
る」

わざわざレース前に私のところに来て「今年リギルはこれ以上のメンバー募集をしない」とわざわざ言ったのはそういうことなんだろう。例えそうじゃなかったのなら、それはそれで何とかするしかない。

「会長さんには頭が上がりません。あとでお礼に言わないといけませんね」

「大丈夫だ。あいつは博愛主義に見えるが、その実自分が見たいもののために動いているだけなんだ。あんまり甘やかすな」

「失礼ですが、トレーナーさんはルドルフ会長とはどのような関係なのでしょうか。ス

ズパレード先輩との対戦以外に接点か？」

「基本それ以外に接点はない。こつちからしてみれば、につくき仇敵なんだが……：：：気をつける。あれに遠慮がなくなったら終わりだぞ」

具体的に言えば私みたいなことになる。そう言うとき苦笑いを浮かべながら適当な相槌を打った。

関係ない話で盛り上がってしまうな。さっさと本題に移らなくては。

「真面目な話をしようか。もし決まっているのなら、まずは目標を教えてください。オグリラクローヌ」

「あつ。クロでお願いします。言いにくいでしょうし、先輩方からもそう呼ばれているので」

「ではクロ、改めて君の目標を」

何だか猫みたいなあだ名だと思いつつながら改めて尋ねると、言いよどみつつも最後はちゃんと言葉にしてくれた。

「えつと……、クラシック三冠、です」

「……」

ルドルフが目をかけたのだ。何となく予想はできたが実際に聞くとこう、何とというか、困る。

「す、すいません！忘れてください！」

手をワタワタさせて取り消そうとするクロ。不用意に不安にさせてしまったようだ。そういえばスズパレードにも唐突に考え込むのはあまりよくないと言われていた。

「すまない。以前挑戦した時は、NHKマイルまででほぼ離脱させてしまったから少し、な」

皐月賞のあともう一度ルドルフと戦うつもりだったが、結局それっきりになってしまった。スズパレードの戦績を知っているのかクロは複雑そうな表情をする。

「宝塚に逃げるというのも大概な気がします」

「ルドルフよりはマシと思つて登録した。彼女ならシニア相手でも好走するだろうし、それで自信を持つてくれればと思つたのだが……、結果は予想以上だった」

勝つた上でルドルフ恐怖症をさらに悪化させるとは思わなんだ。

「まあ昔のことは置いといてだ。問題は君のことだ。三冠を目指すとのことだが、もっと具体的な希望はあるか？ デビュー時期とか、ステツプレースは何にしたいとか」
するとまたしても対面が慌て始めた。

「実はその……レース形式で走つたのは小学校以来でして……、ちゃんとした芝のコースを走つたのも今回が初めてだったり、そもそも、もうすぐ冬なのに私は皐月賞に間に合うんでしょうか？」

「落ち着け。言っちゃ悪いがレース経験も芝のコースも初めてというのは意外だな。両親の關係で嫌でもやらされそうだが」

今度は苦虫を噛み潰したような顔になった。

何というか、思つたより表情豊かな子だ。

「私、あまり期待されていなかったもので、両親から指導を受けたことがほとんどないんです。特に母からは一切、指導を受けた記憶がなくて」

「嫌なことを思い出させたか。申し訳ない」

思つた通り家庭の方で問題があつたようだ。こちらが謝ると「いえいえ」と

「でもこうやってなんとかトレセン学園に滑り込めて、運良くトレーナーさんに会えませんでしたし！ 結果オーライです。ここから頑張つて両親をぎやふんと言わせてみせますよ！ それに入学前、妹とかかけっこしたら生まれて初めて勝てたんですよ？」

「もしや妹は来年あたり入学予定か？」

「はい。自慢の妹です。母も期待してて、付きっ切りで指導してました。まあ勝つたと言つても遊びでですけど……」

自嘲気味にクロが語る。

そう。実はあのソールの娘が入学してくると、一部のトレーナー間では既に話題になっていた。色々あつた方なので、皆積極的に話そうとはしていないが、

ただし、それは来年度の話だった。

……こうやって事実を並べられると、どうにも違和感がある。虫食いだらけで憶測もすら怪しいが。

「……そうか。何であれ君は今スタートラインに立ったんだ。すべてはこれからだ」

言いたいことも聞きたいこともあるが、今じゃない。走っていくうちにわかるものもたくさんあるだろう。

良くも悪くも。

「さて、クラシックに間に合うかについてだが、結論から言えば走ってみなきゃ分からない、だ」

「それを私はどう捉えればよろしいのでしょうか……?」

「そのままの意味だ。レースというのは出来る限り準備を重ねて、ありたけ包んで押しつぶすと言うのが私の考えでな。残念ながら今は準備しようにも土台となるデータが足りない。しかも実戦でノーミスは有り得ない。今何を言っても机上の空論なのさ」
例え母親がエプソムの丘を切り裂いた豪脚の持ち主でも、娘が同じとは限らない。その母親ですら絶対ではなかったのだ。

絶対があると言われたウマ娘は現状、かの皇帝ただ1人である。

その皇帝ですら3度の負けがあるのだから。

それにノープランだったというのならむしろ好都合だ。

「だから手っ取り早く行こう」

「手っ取り早く、ですか？」

「ああ。多分これが一番早いと思います」

不安な現状を更に悪化させてしまうかもしれないが、こればかりは仕方ない。彼女の状況を顧みれば、むしろ最善手まである。

「ところで君は運がいい方か？」

G1最短優勝RTAはっじまーるよー。

「半ば冗談のつもりだったんだがなあ」

雪がチラつく年末の中山、クロがウイニングランを行っていた。

なんとということでしょう！ オグリが！ あの芦毛の怪物が！ 年末の中山に帰っ

てきました！

鼻声になっている実況を聞いて沸き立つ観客を尻目に1人頭を抱えた。

これは面倒なことになるぞ、と。

とある雑誌のインタビュー記事②

「皆ラクローヌのことをオグリキャップの息子として見てますが、自分にとっては『ソール』の息子という印象が強いですね。もちろん。ソールの主戦だった鼻肩目はありますが」

例えばどんな所が母親に似たのでしょうか。

「あの操縦性の高さはソールの子ども共通の特徴ですね。ラクローヌは特にそれが抜きん出ていました」

要は賢い馬だと？ それに関してはオグリキャップにも通じるところがあると思いますが。

「それもありませんが、それだけではないんです。わかりやすいのはスタート部分ですね。粹順関係なく、いつも簡単に好位置をとってたでしょう？」

確かに安定感がありましたね。あの行き脚の良さはオグリキャップにはなかったかもしれません。

「わかりやすいのがスタート部分というだけで、実際はレース中ずーっと騎手の指示通りに動いてくれるんですよ。サラブレッドは機械ではありません。どんなに賢い馬でもg oサインと、実際のタイミングになんとなくタイムラグを感じるんですが、ソールのそれはかなり小さなものだった。その上であのキレ味です。『行く』と思つたタイミングで本当に『行けた』のは、自分にはソール以外に経験はありませんね。あの軽くて力強い脚は、ラクローヌにも完璧に受け継がれていたように見えます」

その割にソールは追い込み一辺倒だったようですが。

「そうなんですよね。だから皆さんソールとラクローヌがあまり結び付かないのでしようけど、自分からしてみれば矛盾しないんですよ。親子で馬群が好きじゃなかったんです」

ラクローヌに逃げが多かったのは、能力だけでなく気性の問題もあったと

「その辺りは鞍上と陣営の経験値もあると思います。ソールがクラシックで引退してしまつたのは、自分が彼女の能力に夢中になつて追込競馬ばかりしてしまつたのもあるんです。有馬でマックイーンに負けた挙句、屈腱炎で引退と聞いた時は荒れましたね。朝まで呑んで後輩に宥められる羽目になりました」

ですがあの時引退しなかつたら、ラクローヌは産まれなかつたかもしれません。

「そうですね。まさか競走馬以上に母親として競馬界に貢献するとは、当時は夢にも思

いませんでした。万事塞翁が馬と言いますが、未来は誰にもわかりませんね」